

新疆ウイグル自治区におけるバイリンガル現象の地域的変異

アナトラ, グリジャナティ
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻 : 博士課程1年

<https://doi.org/10.15017/7374748>

出版情報 : 国際教育文化研究. 6, pp.125-136, 2006-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



新疆ウイグル自治区におけるバイリンガル現象の地域的変異

アナトラ・グリジャナティ

はじめに

中国では民族言語教育をめぐる、それを擁護し存続させようとする立場と、国家の統合と近代化のために漢語の普及を最優先課題と見なす立場がある。その両方の要求を満たすべく登場したバイリンガル教育は、実施過程において様々な困難と課題に直面している。新疆の場合は、各地域の民族構成と生活環境の違いによってバイリンガル教育やバイリンガル現象に地域格差が生じており、それに関わって様々な社会問題が現れている。本論では、ウイグル族が多く居住している南新疆と漢族が多く居住している北新疆⁽¹⁾の生活環境や生活実態の違いにもとづきながら、主にカシュガル市及び近郊地域とウルムチ市の比較を中心にバイリンガル教育やバイリンガル現象の差異・格差に注目した考察を行なう。そして、同一言語や文化を共有する社会の中二言語を使用する機会がどの程度開かれているか、新聞・テレビを始めとするマスメディアに使用されている言語の役割はどうなっているか、社会全体が二言語を使用する傾向を維持しているかなどとバイリンガル現象の関わりについても検討していく。

I バイリンガル現象の地域性

ロッド・エリスは、「社会的コンテクストは、学習者が第二言語を聞いたり話したりする機会を与え、その言語に対する学習者の学習態度に影響を及ぼす」と指摘しており（2003：22）、細川は、「言語は接触しない。言語を話す人々が接触する。ふたつまたはそれ以上の言語間の相互影響（いわゆる干渉作用 interference）を研究する際には、したがって、人々がどのように政治的・経済的・社会的状況のもとで接触したかを考える必要がある」と指摘している（1996：245）。新疆のバイリンガル教育やバイリンガル現象を論ずる場合も、ウイグル族を取り巻く政治的・経済的・社会的状況を確認する必要があると思われる。なぜならば人口構成及び生活環境はバイリンガル現象に最も大きな影響を与えられからである。

新疆の各地域の環境的諸条件によって同じウイグル族でも生業形態が異なり、生活環境も異なっている。その生活環境の違いによって言語を使い分ける必要性が生じる。複数の民族で構成されている社会の場合は、その社会が二言語使用をサポートする傾向がある。逆に、単純な民族構成であった場合、その社会においてはモノリンガルであっても日々の生活を送ることが

できる。現在、中国社会において、一般に市場価値の最も高い言語が漢語であることは言うまでもない。北新疆と南新疆の間には、風景、人々の服装、街のたたずまいだけではなく市場経済の浸透と対外開放の度合いに応じて人々の気風や議論、仕事の進め方にも大きな隔たりがある。また、民族構成の違いによって、漢族が総人口の6割に達している北新疆では、漢語はかなり広い範囲にわたって普及しており、進学、就職、権威などの象徴として認識されている。新疆の公用語であったウイグル語がウイグル族により使用される場所は極端かつ明確に決められ、漢語を使用する場所と区別されている。表(1)からもわかるように、各職業においてウイグル族と漢族の割合が大きく異なっており、農・牧・林業以外の公的職業に従事しているウイグル族は漢族より相対的に少ないということもあり、漢語の重要性がより顕在化しつつある。

表(1) 新疆のウイグル族と漢族の職業構成(1990年)

在業総数% 民族別		技術人員%		幹部%		事務員%		商業人員%	
		1982年	1990年	1982年	1990年	1982年	1990年	1982年	1990年
ウイグル族	100.0	4.2	4.1	0.9	0.9	0.9	1.1	1.4	2.0
漢族	100.0	12.4	12.4	3.9	4.5	3.6	4.5	2.3	4.2

在業総数% 民族別		サービス性人員%		農牧林業労働者%		生産工人%		その他%	
		1982年	1990年	1982年	1990年	1982年	1990年	1982年	1990年
ウイグル族	100.0	1.4	1.6	84	84.1	7.1	6.1	0.0	0.0
漢族	100.0	4.9	4.9	38.2	38.1	34.5	31.2	0.1	0.2

出所：馬戎 2001「新疆喀什地区的民族人口分布」P104から作成

新中国の成立に伴って施行された“共同綱領”に「各少数民族は各自の言語と文字を発展させる自由がある。」と規定されて以来、「各民族自治区や自治機関では、その自治区や自治機関で通用している民族文字による職務を遂行し、各民族の代表は人民代表会議及びその他の会議でも自民族の言語や文字を使用する権利がある」ことが認められた⁽²⁾。現在においても基本的には、民族言語の使用が自由であることに変わりはない⁽³⁾。しかし、これらを徹底して実施しているわけではなく実際のところ、ウルムチ市などの大都会では、ウイグル族の割合が少ないこともあって、家を出るとすべてが漢語の世界であることも事実であり、二言語併存は認められているが二言語使用は一般的に存在しない。その一方、ウイグル族が集中的に居住している南新疆においては、家庭、ウイグル族コミュニティ内部、公的場面などで用いられる言語は、ほとんどウイグル語であると言えるほど、民族言語だけのモノリンガル現象を示している地域も少なからず存在している。

言語のコミュニケーションとしての機能を活かすために、その言語を使える言語環境が必要

となる。宮岡伯人(2002)は、「言語はたんなる伝達の道具にとどまるものではない。すなわち、「環境」に対する直接機能的な働きもある。」と指摘しており、李建軍(2003)は、人々の交流、情報交換などは言語環境を通して行うと指摘している。新疆の民族構成と生活環境を念頭において考えて見ると、漢族が多く居住している地域では、これらの言語環境がすべて揃っており、漢族文化の中で挨拶言葉としてよく使われていた“Ni chi le ma?”(食べましたか?)に対してもあまり違和感を感じない。しかし、ウイグル族が多く居住している地域において同じような言葉が使われたら、それを挨拶の言葉として理解するウイグル族はまだ多くない。

漢語教育では、今まで学校教育が中心に考えられており、漢語と接触がある社会環境と漢語と接触がない社会環境の漢語学習の効果が違ってくることにあまり注目されてこなかった。社会環境は、民族構成と生活環境二つの側面から漢語教育に影響を与えている。各地域の民族構成の違いによって、生活環境と言語環境も大きく異なっている。異なる言語環境は新疆におけるバイリンガル現象の地域性を生み出す無視できない要因のひとつであると思われる。この地域性があつたからこそ、様々な教育制度の実行にも時間的な差異が起り、その結果として民族学校に通っている学生の漢語能力にも地域による格差が現れている。また、地域によって少数民族学生の学習効果が上がらないのは、言語のハンディキャップが大いに影響している。民族学校での学生達は少なくともふたつの言語をマスターしなければならない。即ち漢語と自分の民族の言語である。授業は主に民族言語で行い、それに漢語科目を加える。しかもその科目としての漢語も単語の読み書きを除けばウイグル語で教えることが多い。このような教学方式や地域性によって、民族学校卒業後、進学や就職等の面で、漢族の学生とはもちろん、同じウイグル族の学生同士でも平等な競争ができないという現象が現れている。

II ウルムチ市の言語使用実態

ウルムチ市は新疆ウイグル自治区の区都で、新疆の経済、文化、政治の中心地であるだけでなく、中央アジアの各国に近接しており、ユーラシア大陸の東と西を結ぶ文化、宗教、経済の国際的な中継地としても注目されている新疆の最大の都市である。人口は1,815,296人で、13民族から構成される多民族の社会である(2004年統計)。その180万人余りの人口の中で一番多い民族は、漢族であり総人口の73.1%を占めている。その次がウイグル族で13.3%、回族は8.85%、カザフ族は2.89%という割合になっている。違う民族同士が隣り合い、互いに影響し合って生活している。長く住んでいる老人が幾つかの民族の言葉を話せることも珍しくない。清朝統治時代では、新疆を統治する王朝の中心はイリに置かれ、ウルムチはその単なる後援地であった。ウルムチが本格的に新疆の中心になったのは、1884年新疆省になった後のことである。李天国(2000)によると清朝のときウルムチに“満城”と“漢城”が建てられ、多くの漢族商人が入ってきたのである。近代のウルムチ市は、その“満城”と“漢城”を基礎として発展してきた。このような歴史的背景からウルムチ市では、ウイグル族と漢族との接触が頻繁にあったと予測できる。現在においては、総人口の73.1%を示す漢族の人口密度が高い人口構成の中で、住宅内、学校、職場などの様々な場面において漢族とウイグル族の接触が増え、漢語がコミュニケーション上重要な役割を果たす言語となっている。

特に 1993 年から開かれた“ウルムチ市貿易洽談会”（ウルムチ市貿易談合会）により、新疆と内地、外国との貿易交流も頻繁に行なわれるようになった。この談合会によって、新疆の各民族・各社会は、道具としての言語の実用性を重視するようになり、コミュニケーション上最も実用性の高い言語（漢語）を主要な学習言語とする傾向が現れた。全世界的にみれば、英語が各国の経済、外交活動及び学術交流の主要な言語となっているのと同じである。英語が分からなければ世界の知識体系の外に置かれてしまい、各国の研究成果を吸収することもできない。多民族の国家である中国において漢語は、中国数千年の文化発展と現代社会の発展プロセスの中で既に中華民族の共通語になっており、漢語を学び習得することは各地域の社会、経済、文化的発展及び個人のキャリア形成（少数民族も含む）、企業やその事業の発展に極めて重要な役割を果たしている。

ウルムチ市を始め漢族が多く居住している地域では、その社会のあり方自体が漢語の使用をサポートしていると言える。学校で学習したものを生活の中で実際に使用することによって、人々の漢語レベルは日常生活に支障のないレベルまで達成している。家を一步出れば、ウイグル族コミュニティ以外の場所では、社会参加の条件として漢語の運用能力が不可欠であるという現実がある。例えば、生活に必要な毎日の買い物において、漢語が話せないと、ジェスチャーで何を買いたいのかを相手に伝えることになる。また、2001 年にウルムチ市に 6 階建てのデパートができたが、ここのサービスカウンターの係員は 1 人のウイグル族を除きすべて漢族であった。さらに、2003 年に成立した国有企業である新疆国際大バザールにしても、それが新疆の代表的な商業と民族文化発展の国際型企業でありながら、そこでの商売人の 6 割以上が漢族であった。漢語ができない人には、決して買い物ができないということはないが、自分の必要に応じて商品を選んだり、値段を交渉したりすることができず、不利益をこうむるウイグル人は多い。

新疆ウイグル自治区人民代表大会、新疆ウイグル自治区人民政府、司法機関、裁判所など特定の国家機関においては、基本的に少数民族関係の仕事は少数民族の職員が担当しており、通訳の職員もいる。これらの国家機関における言語使用状況は、社会的二言語使用ではないが、ウイグル族の人々は個人的にウイグル語と漢語の二言語を使用している。銀行、郵便局など公的な場所においては、漢語の使用率ははるかに高い。また、病院に行ってみると 10 人の医師のうちウイグル族の医師が一人いるかどうかであり、患者は漢語ができないと、漢族の医師に自分の病状を伝えることもできない。漢字が読めないと薬の説明書なども読めない。漢語ができない患者は簡単な通訳ができる人を連れて病院に行くのが普通のことになっている。

高等教育機関の例として、筆者が以前勤めていた新疆工学院の言語教学研究部では、教職員 100 人余りのうちウイグル族の教職員が僅か 14 人（教員は 5 人）しかなかった。新入生の少数民族学生を扱う言語教学研究部には、毎年およそ 1000 人の学生が入学しており、そのなかには、極端な例ではあるが、挨拶がやっとの漢語レベルの学生も少なくはなかった。これらの学生が漢語を 1 年間ないし 2 年間勉強して、ほとんどの学生の漢語レベルが専門科目を漢語で受けられるまで上達したのは、ウルムチ市の言語環境が漢語教育をサポートしているからと言える。

テレビ、新聞、ラジオなどのメディアの世界にも漢語、漢族文化が深く浸透し、ウイグル文

化と密接にからみ合って、人々の漢語聴力や会話力を高めることをサポートしている。例えば、テレビ番組。新疆で一般に視聴できるチャンネルには、中央電視台（中央テレビ局）のニュースチャンネルのほか、新疆電視台（新疆テレビ局）などの地方チャンネルがある。その編成は漢語放送がほとんどであるが、このほかウイグル語、カザフ語のチャンネルも若干ある。ウイグル語チャンネルにおいては、音楽番組などウイグル文化の雰囲気が濃厚なものも多いが、北京や上海で作られた漢語のドラマ、ニュースをウイグル語に訳したものもある。また、比較的普及しているケーブルテレビを用いて、中央電視台のすべての専門チャンネルやその他各主要都市のチャンネルを視聴することができる。これらはすべて漢語の放送であり、このような状態の中で、若い世代を中心に漢語のテレビ番組を視聴する人々が数多く存在している。

2004年、筆者がウルムチ市で30代の50人（全員民族学校出身、大卒）に簡単なアンケート調査を行った。まず、家庭で使われている言葉は全員ウイグル語であったが、しかし無意識に漢語を混ぜて使用しているというのが現実のようであった。よく見ているテレビ番組については、ウイグルの文芸プログラム以外は漢語の番組を選んでいる人が比較的多かった。その漢語のテレビ番組はすべての言葉を理解しながら見ているわけではなく、画像があるからすべての言葉が理解できなくても、内容は大体わかるというのが人々の話であった。これに対して、ラジオはウイグル語のプログラムを聞くという人が多い。その理由としては、「漢語のスピードが速いからイメージしにくい。小説ならほとんど理解できるが、ニュースは、やはり難しい」などが挙げられていた。新聞や雑誌などについては、職業関係でなければウイグル語で書かれたものを読むが、仕事に必要とする場合は、時間をかけて漢語の本を読むしかないという答えもあった。この50人のHSK成績を見てみると8級レベルに合格したものは3人、7級に合格したのは2人、6級は1人、5級は2人、残りの42人はこれから受ける予定であった。このような生活環境の中で、ウルムチ市では、幼稚園児でも流暢な漢語が話せ、少なくとも口語で日常生活に困ることはない。その一方で、ウイグル語に漢語を混ぜながらコミュニケーションをとるという“混合語”現象も広がりつつある。

Ⅲ カシュガル市の言語使用実態

新疆の人口と民族構成から、新疆ウイグル自治区の中でのウイグル族の人口分布は、主に南新疆に集中しているといえる。中でもホータン地区のウイグル族の割合は最も高く、総人口の97%を占めるまで至っており、ほぼウイグル族による単一民族構成である。南新疆の民族構成から考える場合、ウイグル族は南新疆のマジョリティであり、南新疆の主流になっている。全国的なマジョリティの漢族は、このウイグル族主流の社会の中ではマイノリティとなっている。王振本も、この地域においてウイグル語が通用言語であり、各民族の交流言語でもあると主張する。ここに散居している他の少数民族は漢民族も含めて、生活や仕事の必要性から次第にウイグル語をマスターするようになった。その結果、南新疆は新疆のなかで特殊なモノリンガル地域であると指摘されている（王振本 2001：52）。

ウイグル族が最も多い、伝統的なイスラム文化区である南新疆ではオアシス灌漑農業が主な生業形態であって、行政機関や個人営業以外に工場などの働き口はほとんどない。農村部のオ

アシス地域の各家庭においては、漢族との接触はほとんどなく、漢族と共存する都市部でさえ心理的な障壁から仕事以外の場における漢族との交流はいたって少ない。農村にはウイグル族だけの単一の村も少なくはない。単一民族構成の村は他の民族と交流する機会が少なく、閉鎖的或いは半閉鎖的状态の社会経済文化体系をずっと維持している。これは南新疆社会の発展の上で大きな障害でもあり、バイリンガル教育やバイリンガル現象を促進する上での障害でもある。

このように、農業が中心になっているウイグル族社会では、学校教育に対する態度は一般にネガティブであり、日常生活では漢語の使用を必要としないため漢語教育に対しても、あまり熱心ではない。それに、政府による漢語教育実施の推進は、結果的に都市部だけにとどまり、ウイグル族社会全体に浸透するまでに至っていない。実際、現地の漢語教育に関する政府への報告においては、80年代の初頭になっても、多くの学校、特に小学校では漢語の科目が開設されていなかった。例えば、カシュガル地区のように1987年によく漢語教育が始まった地域もある。それは北新疆出身と南新疆出身の学生の漢語能力の格差とバイリンガル現象の地域性を生み出す要因のひとつとして考えられる。

一般に、北新疆と比べ南新疆のウイグル族の家庭やコミュニティにおいては、漢語の使用度が低く、漢語がそれほど普及しているとは言い難い。また、専門の漢語教師が不足していて漢語学習の質がかなり低い状態にある。新疆ウイグル自治区党中央政策研究室と自治区教育庁のデータによると、2000年現在では、全新疆の漢語教師は14,993人で（大学を除く）1万人の漢語教師が不足している。また、全体の僅か2%が漢語を母語とする漢族の教師である。康健（2001）によると、南新疆にあるカシュガル師範学院では、1962年当時、漢語教育に従事していた教員のうち1人の“民考漢”の回族を除きほぼ全員漢族であった。文革時期においては、大中専門学校も含めて漢語教育が停止となったが、1976年から再び漢族を対象に小中学校の漢語教師を養成する専門学科を回復した。最初の卒業生300人だったが、しかしながら教員職に就いたのはその3%に過ぎなかった。現在、カシュガル師範学院に漢語教師が44人おり、そのうち9人が少数民族である。それに市内にある各専門学校には70人の漢語教師がいるが、そのうち漢族は9人で、総人数の僅か13%を占めているにすぎない。中学校18校と小学校68校を合わせて漢語教師が321人おり、そのうち漢族が6人と僅か2%に満たない。これらの漢語教師も、特に小中学校の漢語教師の場合、その漢語能力は低く、発音にしても四声の区別がはっきりできない。朗読力、文法解釈力、翻訳力などすべてにおいて欠けている。正しい、流暢な漢語会話もできないため授業は母語で行ってきたのだ。王振本（2001）も、南新疆の学生の漢語レベルは低く、“民漢兼通”の目標を達成するにはまだ遠いと指摘し、その原因として漢語教師の不足と素質が低いという問題点を挙げている。

ウイグル族の漢語レベルの低さの背景としては、このような学校教育以外にも、この地方の経済活動の特徴づけているオアシスの経済の存在が重要と思われる。南新疆のオアシス経済を支えるバザールの存在はウイグル族の社会内部におけるネットワークの広がりを発達させ、ウイグル族社会の経済面における自律性を保持する重要な役割を果たしてきた。南新疆では現在でも農村人口が多数を占めており、農産物としては小麦、米などの穀物をはじめ、メロン、ス

イカ、イチジク、ザクロ、アンズ、葡萄などの果実が豊富に生産され、これらは商品作物としてバザールで取り引きされる。他方、南新疆の都市部、特にカシュガル市においては金物、道具、ドッパと呼ばれる帽子、サンドウクという箱などをつくる伝統的な手工業や商売を営む職人たちが集まっている職人街もある。

カシュガル地区は、地区行政府のカシュガル市と 11 の県から構成され、このうち歴史的にカシュガル・オアシスの範囲はカシュガル市とほぼ 5 県を含む。5 県のひとつに疏附県があり、疏附県はひとつの鎮と 17 の郷から構成されている。郷はもと人民公社に該当した単位で、現在は最末端の人民政府がおかれている。郷の下組織は村である。バザールを管理する市場管理局が上から、地区、カシュガル市・各県に、市場管理站が複数の郷にひとつずつおかれている。バザールには都市バザールと農村バザールの 2 種類がある。筆者の 2004 年の現地調査では、カシュガル市の職人街と都市バザール、また、カシュガル市から約 40 キロの月曜日に開催するオパル郷の農村バザールにおいて、人々の言語使用状況を確認することができた。真田は、「バザールには驚くほどの人が集まる。自動車、大型機械、高級電化製品を除けばすべてが売られている、といってよい。」(真田 1999: 57) と指摘しているようにバザールには大勢の人々が集まりモノ、商売・取引・交易を行っている。さらに一歩立ち入れば、売り手と買い手の交流言語を直接把握することができる。

カシュガル地区の総人口の 89.5% をウイグル語話者としてのウイグル族だけで占めており、漢族は僅か 8.9% しかいない。カシュガル市から県、村、郷の小さな行政レベルになるほど漢族が少なくなり、ウイグル族の単一民族構成になっている。バザールにおいても、ウイグル語だけのモノリンガルで商売ができ、漢語が話せなくても売上に影響する心配はあまりない。例えば、月曜日に開催するオパル郷の農村バザールを見てみると、このバザールの露店数、商品量は、カシュガル市の都市バザールに対して少ないが、商品・交易品の種類は同じ物が揃っている。農村バザールに集まる人々は農村居住者で、売り手は未成年の子供も含めてほとんどが男性であり、女性の売り手はごく少数である。その理由としてはイスラム教の影響が考えられる。

このオパルバザールは、野菜や肉の生鮮食料品、料理店、穀物やドライフルーツ、香辛料など食料品、砂糖や菓子など副食品、布や衣類、靴や帽子などの生活用品、鍋や食器など生活用具、農具、家畜用具、機械部品、食肉用の羊や運搬用のロバなど家畜まで商品の種類が充実していた。買い手に注目すると筆者と同行した A 氏以外には漢族の姿が見えなかった(2004 年 8 月 23 日)。A 氏も綺麗なウイグル語が話せ、筆者との交流は漢語で行ったが、バザールにおいての言語使用は自然にウイグル語に切り替えた。ここには二言語併存と二言語使用はほとんどなく、ウイグル語のモノリンガルでも障害なく生活を送っていると言える。その一方、カシュガル市内の都市バザールにおいては、経済発展と社会変化によって人々の価値観も多様化しており、ウイグル語の世界にも変化が訪れつつある。それは、中国政府が少数民族の多様な文化を観光資源として活用することを奨励していることとつながっている。

王柯(2005)も指摘したように、ここ数年経済成長が続く中国では、週休 2 日制と旧正月、5 月のメーデー、10 月の建国記念日という年 3 回のゴールデン・ウィークが導入されたため、観

光ブームが起こった。外国へ旅行する政治的・経済的環境がまだ完全に整っていないせい、少数民族地域は漢族の観光客に人気が高い。その理由は、美しい風景、汚染のない空気、昔のたたずまいを残した建築、そして純朴な気風が漢族観光客の郷愁を誘うからである。新疆の旅行業も大きな発展を遂げ、外部社会との交流が広がりつつある。新疆の旅行コースにカシュガル市は必ず入っており、ウイグル族の独特な伝統文化、伝統的芸術、飲食文化、風土慣習などの特徴から国内外の観光客でにぎわっている。観光客は、国内在住の漢族が圧倒的に多い。現地の漢族は、ウイグル語が流暢に話せなくとも相手が言いたいことを充分に理解できるので、漢語ができないウイグル族も日常生活において困ることはない。しかし、観光客である漢族の場合、ウイグル語ができないので、商人であるウイグル族は漢語ができないと交易ができないということはある。カシュガル市の観光客の増加がカシュガルの経済発展とつながり、人々が経済的豊かさを求めて、積極的に漢語を身に付けようとする傾向を示しつつある。

ウルムチ市と違って、公共の場でもウイグル族の割合が多い。漢族がいるとしても、ほとんどはウイグル語ができる。銀行、郵便局、病院などに行った場合は漢語ができないということで、困るような問題はないと言える。マスメディアではテレビの場合、カシュガル市内では中央電視台、新疆電視台とカシュガル電視台合わせて44チャンネルが見られる。市内に居住している人々は、漢語がある程度できる。言語環境は確かに農村とあまり変わらないが、少なくともテレビ番組を通して漢語を耳にするチャンスはある。しかし、市から県、村、郷方に行くと、テレビを持っている人は数えるほどしかない。漢語を話すチャンスもなく、テレビなどのメディアを通して漢語を耳にすることもできない。

馬戎(2001)はカシュガル市及び4つの県の行政機関における漢族人口とウイグル族人口の割合を以下の4つの類型にまとめている。第1の類型は、カシュガル地区の各県鎮城の関所区であり、全県の政治、経済、文化、教育、商売、医療、交通通信の中心になっている。表(2)からもわかるように、カシュガル市にある4つの区の人口のなかに漢族の割合は29.2%となっており、他の4つの県においても漢族の割合は、17~36%の間にあり、漢族の多くは県城(県の中心部)に居住していることが伺える。第2の類型は、郷をはじめとする各県の農業地区であり、県総人口の85%以上が農民を占める。これらの地区においては、漢族人口は僅か0.3~2%しか占めていない。ただし、ひとつの例外としてポスカム県では、漢族人口の割合は8.5%に達している。第3の類型は、高い技術力が求められている国营農牧場、種畜場、園芸場などであり、一般的に漢族人口の比率は比較的に高く10~40%占めている。例えば、コナシェルの種畜場では1115人の従業員がおり、そのなか漢族は553人である。イエギシェヘル県の食品工場に1919人の従業員がおり、そのなか漢族は1027人である。第4の類型は、自治区または中央に直接管轄される石油基地、兵団などの機構である。従業員は現地からも募集しているが、そのほとんどが内地から移動した漢族が多い。例えば、ポスカム県の石油基地では、漢族の割合が66.4%であり、イエギシェヘル県の兵団では91.7%である。

2004年の人口統計から見れば、カシュガル地区の総人口は3,501,198人であり、ウイグル族は総人口の89.5%を占め、漢族は僅か8.95%しかない。その僅かな漢族も市内や県城に居住しており、農村においては内地からの流動人口が増えつつあるが漢族の定住人口がますます少

なくなっている。その流動人口は、主に農業に従事し、春に来て秋に帰る。彼らは現地のウイグル族との交流がほとんどないため、これらの地域のウイグル語のみの言語環境を漢語使用も含めた言語環境に変えることにはポジティブな影響を与えていない。逆に、言語・文化、宗教、生活習慣などの違いで互いに誤解を与えることも少なからず存在している。

表（2） カシュガル市及びカシュガル地区4つの県郷鎮の単位民族構成

		行政単位		ウイグル族%		漢族%		1982－1990
		1982	1990	1982	1990	1982	1990	漢族%変化
カシュガル市	城区事務所	4	4	65.5	69.0	32.8	29.2	－
	公社／郷	7	3	99.7	96.1	0.2	3.3	＋
	農牧林場	2	2	93.8	69.5	6.0	29.4	＋
コナシェール県	県城鎮区	1	1	77.5	76	21.7	23.3	＋
	公社／郷	10	17	99.0	98.4	0.6	1.1	＋
	農牧林場	5	5	56.5	66.1	41.8	32.7	－
イエキシェール県	鎮区	1	1	50.7	61.9	47.6	36.8	－
	公社／郷鎮	12	14	99.7	99.5	0.1	0.3	＋
	農牧林場	3	8	61.6	58.6	37.7	40.6	＋
	兵团	1	1	6.7	7.1	92.1	91.7	－
インジサ県	県城鎮区	1	1	79.2	82.4	20.2	17.0	－
	公社／郷	12	13	99.3	99.4	0.2	0.2	－
	農牧林場	1	7	61.6	89.2	36.2	9.3	－
ホースカム県	県城鎮区	1	1	67.7	67.9	31.0	30.9	－
	公社／郷鎮	9	11	91.5	88.2	5.2	8.5	＋
	農牧林場	4	4	81.2	84.9	17.5	14.3	－
	石油基地	1	1	22.7	31.9	75.8	66.4	－

出所：馬戎 2001「新疆喀什地区的民族人口分布」P107

新疆ウイグル自治区民族言語文字工作委员会の調査によると、新疆の少数民族は1千万人余りであり、その70%が漢語を十分に理解し運用することができない⁽⁴⁾。主要少数民族であるウイグル族、カザフ族、キルギズ族、モンゴル族の80%以上が比較的漢族との接触がない状態であり、現在は主に自民族の言語と文字を使用するモノリンガル現象にある。自治区党中央委員会と人民政府が幹部や技術員のバイリンガル育成を強化することを目的として、その現状を把握のために行った調査によると、漢語の公文書を読める、漢語を使って仕事についての議論ができる、聞き取り能力と弁論能力が揃っている幹部は郷と鎮では16.54%、それが県レベルでは12.6%に過ぎない。日常生活においては、簡単な会話はできるが漢字が読めない、漢語での報告を聞き取れない県（市）レベルの機関幹部は53.41%、それが郷と鎮レベルにおいては42.16%である。ほとんど漢語能力がない県（市）レベルの機関幹部は33.83%、郷と鎮レベルの幹部は41.03%を占めている。南新疆の少数民族が集中している県、村、郷ではバイリンガルの人口割合が更に低く、幹部もほとんど漢語ができない。

90年代に入ってから急激な社会変化にともなう、農業にしても先進科学技術を学ぶためには漢語が重要であるという認識が南新疆の人々の間で一般化してきたが、ウイグル語の実用性、即ち、情報を伝えるための手段、コミュニケーションの道具としての役割は依然として十分に維持されており、また、母語だけで支障なく日常生活を送ることができる地域も多く存在している点において、“民漢兼通”を達成するのに適した言語環境としては不利な状況であると思われる。

おわりに

国際的な交流や世界貿易はいくつもの言語を使ってなされる。馬戎（2004）によると、中国では“族際語”である漢語が次第に普及し、少数民族もこれを学び、習得することは、中国の社会発展の趨勢であり、それは人々の主観的意志によってなされることではなく、遅かれ早かれいずれは起こることである。中国の経済発展、人々の流動、労働力市場化の発展などによってもバイリンガル教育や漢語を学習することに対する要求が高まっており、特にウルムチ市において少数民族学生が自己発展のニーズに合わせて民族学校に入学するか普通学校に入学するかを選ぶ傾向が強まっている。子供が経済的・教育的利益を得られると考え、民族学校の3年生に進学した子供を普通学校の1年生から勉強させ直している例もある程である。ウルムチ市のウイグル族社会においては、コミュニケーション上最も実用性の高い漢語を主要な学習言語とする傾向が強くなりつつある。

南新疆においても、これまで否定的な態度で捉えられてきた漢語教育が社会主義市場経済の導入、特に西部大開発によって積極的に受け入れられるようになり、一般市民レベルにおいても漢語の必要性が強き意識されるようになった。以前、ウイグル語だけのモノリンガルでも問題なく運営でき、ウイグル族社会の経済を支えてきたバザールにおいても経済発展による豊かさの魅力で、現代社会のニーズに適応しようとする傾向にある。李天国（2000）によると、近年、南新疆において余剰農業労働力の問題が表面化し、東側の大都市に移動する南新疆出身のウイグル族が多くなりつつある。南新疆から大都市へ移動する人々はその大都市の開放性をウイグル族社会に持ち込むと同時に南新疆のバイリンガル現象を促進する可能性をおびている。

また、新たな雇用機会を提供する源が内地から進出してきた漢族資本であるため、より高い漢語能力が求められている。そのため、漢語運用能力は、ウイグル族個人にとって就業の成否を決定的に左右する要件や競争社会を勝ち抜くための情報や知識への接近と入手という点において不可欠な条件となり、ウイグル族が漢語習得の必要性をより強く意識せざるを得ないような局面がますます顕在化してきている。

グローバル化が急速に進んでいる今日、内地からの漢族資本の進出によって、ウイグル族固有のバザール経済においても漢語運用能力が求められつつある。社会経済の変動状況を背景に人々の漢語教育に対する意識の変化、またバイリンガル教育の新たな発展動向からみると、バイリンガル現象は社会的拡大の傾向を示しつつあるように思われるが、しかし、バイリンガル現象の地域格差は依然として改善されていない。高等教育機関において教授言語が漢語に一元化されている今日、特に民族教育の発展動向として「多元文化整合教育」⁽⁵⁾が強調され

ているなかで、民族間格差を縮小するためにも、一日も早く地域格差を改善する必要があると思われる。

(1) 新疆を紹介するときには東部と北部を一緒に紹介する場合が多い。李天国(2000)は、新疆を南疆、東疆、北疆に分けて紹介しており、トルファン地区とハミ地区を東疆と指摘している。本論では、東新疆は民族構成的にも地理的にも北新疆に近いということにより南新疆と北新疆に分けて紹介した。北新疆には、ウルムチ市、カルマイ市、石河子市、トルファン地区、ハミ地区、昌吉回族自治州、イリカザフ自治州、塔城地区、阿勒泰地区、博尔塔拉モンゴル自治州等が市や地区がある。南新疆には、バイングロンモンゴル自治州、アクス地区、キズリスギル自治州、カシュガル地区、ホータン地区等市や地区がある。

(2) 『共通綱領』(第53条)、『中華人民共和国民族自治区実施綱領』(第15条、第16条)、『中央人民政府政務院關於地方民族民衆聯合政府實施辦法的決定』『中央人民政府政務院關於保障一切散居的少数民族成分享有民族平等權利的決定』(第41条)などがある。詳しくは、羅常培など著 1954『国内少数民族言語文字的概況』新華書店を参照。

(3) 『中華人民共和国民族区域自治法』第2章、第21条。

(4) 教育部言語文字応用管理司 言語文字工作簡報 第6(2002年9月4日)

<http://202.205.177.129/moe-dept/yuyong/jianbao/six.htm> を参照。

(5) 「多元文化整合教育」とは、中国における民族教育の今後の発展趨勢として位置づけている教育理論(哈経雄/藤星 2001『民族教育学通論』を参照)である。

参考文献

—日本語文献—

王 柯 2005『多民族の国家 中国』岩波新書

細川弘明 1996「民族接触と言語の変容」『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社

横堀克己 他 2005「少数民族の「双語」人材を育てる」『人民中国』10号 人民中国雜誌社

宮岡伯人・崎山理 2002『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』明石書店

李 天国 2000『移動する新疆ウイグル人と中国社会—都市を結ぶダイナミズム—』ハーベスト社

ロッド・エリス著、牧野高吉訳 2003『第二言語習得のメカニズム』筑摩書房

—漢語文献—

哈経雄/藤星 編 2001『民族教育学通論』教育科学出版社

江 平 1994『中華民族問題的理論与实践』中共中央党校出版社

康 健 2001「喀什地区漢語教育概況及思考」『双語教学与研究』2001 中央民族大学出版社

李建軍 2003「語境与漢語教学」『言語与翻譯』4『言語与翻譯』雜誌社

馬 戎 2004『民族社会学—社会学的族群關係研究』北京大学出版社

王 振本/梁威/阿布拉・艾買提/張 勇 2001『新疆少数民族双語教学与研究』民族出版社

王 遠新 1999『双語教学与研究』中央民族大学出版社

王 遠新 2001『双語教学与研究』中央民族大学出版社

新疆ウイグル自治区地方志編纂委員会編 2001~2004『新疆年鑑—2001~2004』新疆年鑑社

Regional Variations in Bilingualism in the Xinjiang Uighur Autonomous Region

Guljennet · Anaytulla

In China one can find two approaches to ethnic language education, that of protecting and preserving such languages, and that of prioritizing the promotion of the spread of the Han Chinese language for the sake of national integration and modernization. Bilingual education which arose to fulfill both of these demands has faced numerous problems and issues during implementation. In the case of Xinjiang, differences due to regional ethnic composition and variations in lifestyle environments have given rise to gaps in bilingual education and the phenomenon of bilingualism, and in turn to various social problems. This paper, basing itself on differences in lifestyle environments and lifestyle circumstances in the Uighur-populous city of Kashgar and neighboring regions to its south and in the Han-populous city of Urumqi, makes an examination of differences and disparities in bilingual education and bilingualism, and, focusing on situations in which the same language or culture is jointly shared in a society, inquires into the relation of bilingualism to: how open opportunities for using two languages are, what the role of the language of television and other mass media is, and whether that society as a whole is maintaining a trend toward using two languages.

Presently, amidst the rapid advance of globalization and Han Chinese capital from central China, demands are arising even amongst the uniquely Uighur bazaar economy for the ability to utilize the Han Chinese language. Changes in peoples' attitudes toward Han Chinese language education against a background of social economic fluctuation, as well as new developmental trends in bilingual education, seem to indicate that bilingualism is showing a societal increase, yet nonetheless extant regional gaps in bilingualism remain unimproved. I suggest, presently, amidst a situation where the medium of instruction in tertiary education has become unified into exclusively Han Chinese, and especially in which "Pluralism Integrated Education" has been emphasized as a trend for development in ethnic education, also that in order to shrink intra-ethnic gaps, that it is an immediate necessity to decrease regional gaps.